

49
118

一新聞記者の手帖

手帖より

国境警察物語

特240

663

中野境夫



0007960000

1

0007960-000

特240-663

国境警察物語

中野境夫・著

代々木出版社

昭和14

ABH

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

國境警察物語

目次

- 一、豆滿江岸の密輸入者……………(一)
- 二、密輸入者異聞……………(一五)
- 三、苦闘する警官達……………(二五)
- 四、支那事變と天津領事館警察……………(三七)

特 290
663

一、豆滿江岸の密輸入者

(1) 股間にぶら下げた阿片の塊



ここは北鮮——馬賊で有名な長白山の尾根が雲に迫つて蜿蜒と走つてゐる。その山麓を東に流れて日本海に注ぎ入る豆滿江。そこには豆滿江國際鐵橋があつて、これが嚴めしく國境を分つてゐる。

昭和×年頃のある天氣清朗な日のことであつた。この橋のところへ、對岸の南陽から一人の男がやつて來た。男は朝鮮服を着てゐて、どことなくのんびりとした風貌をしてゐた。そして彼はあの長いキセルで臭い良の煙の輪をふかしながら歩いて來る。手には孫への手土産でもあらうか、菓子包みらしいものを一つぶらさげてゐる。

全くこんな至極のんびりとした風景は、この國際橋上ではあまり見られないことである。彼はぶらりぶらりと滿洲側監視所の前までやつて來た。そして監視員の前へ近づいて菓子包みをボン

と放け出すやうに置きながら云ふのであつた。

「さて調べていただきますかな。まことにどうもいいお天気で……へへへッ、御役目御苦勞様でございます」

そしていかにも疲れたといった表情と動作で、また長ギセルに一服つめてすばりすばりとやりだした。

「なんだね、これは？」

「へい、菓子でござんすよ」

係員は無雑作に包みを開いて内容を検査した。まがうことなき朝鮮の干菓子である。

「ほかになんにも持つてはゐないかね、あつたら出し給へ」

係員が促すと、男はニコニコしながら答へた。

「どうもね、旦那、欲しいものは山ほどありますが、わしらには買ひたくてもそのなんですよ、現ナマがありませんや……」

「ああよし」

そこで通過はO・Kだ。だがこんなにもんびりしてゐる男も珍らしい。彼はどつこいしよと

腰をあげると、さて、と云つた顔で至極悠然たる動作で歩きだした。するとこのとき、彼の後姿を見送つた係員の一人が、いぶかしげな表情をして云つた。

「どうものんびりし過ぎてゐるやがる、あんまりこれは漫々の過ぎやしないかな？」

「さう云へばどうも」他の一人が答へながら男の後姿を目で追つた。どうも歩き方が變である。なんだ、あの恰好は？そこでおいおいと呼び止めた。「オイ、お前はなにかい、跛足か？」

ふりかへつた男の顔！彼の表情が一瞬さつと變つた。あののんびりとした風貌はもうどこにもあらはれてはゐない。ギクリとしたときの眼である。しまつた！と感じた刹那の顔色である。

「こ奴！」と叫んで係員は駆け出して行つた。そしてむんづとばかり男の肩先を掴んだ。「なにをなさる？なにを？」と、男はしどろもどろの表情で云つた。「わしの一體どこが怪しいんでござりますかかね？」

「いいから一寸来い！もう一度検査せんことには通せんのだ」

もうかうなれば文句はいはせない。監視所へ引き戻して来て無理矢理身體検査だ。しかし懐は勿論腰から上にはなんにも怪しいものは所持してゐない。係員はそこで云つた。

「さあ、貴様ズボンを脱いでみる！」

「め、滅相な」と、男は答へた。「どうも人様の前でこればかりは」

「フンドシまで取れとは云はん、早いことやれ！」

「ところがその、振りなもんで、おまけにわしは畢丸炎をやつとりまして腫れ上つとるもんですから」

「なに？ 畢丸炎だつて？」云ひながら係員は思った。ははあん、だからこ奴あんな變てこな歩き方をしをるのか。だが、次の刹那には一喝を喰はせてゐた。「馬鹿奴！ なにを吐かすか！」そして躍りかかるやうにしながら男のズボンを脱がせた。すると見よ、なんとあのダブダブのズボンの下の、場所もあらうに妙なところへくくりつけられた包！

「ふん、野郎、とんだ畢丸炎だな！」

霧りつつ開いて見ると包の中からは約二貫匁の生阿片の塊が現はれたのである。取調べの結果、こ奴は堂々たる密輸入の常習者であつた。——女がこの手を使ふのはよくあることだが、男にしては珍趣向ではある。そして答辯も考へたものである。畢丸炎で腫れ上つてゐるとは——

(2) 氷上を渡つて来る大八車

昭和九年の春もまだ早い頃のある深更のことである。氷上を巡邏する輯和隊（滿洲警備機關）員は外套の衿に首をうづめるやうにしながら江岸を警戒してゐた。銃を握つてゐる手も凍つてしまひさうである。それもその筈零下三十四五度の寒氣なのだ。

三名の隊員の靴音は凍て切つた空氣にはねかへるやうに、コツンコツンと無氣味に響く。一人がなにか豫感を覺えたやうになつた。

「どうもこんな夜は密輸がありさうだね……ひどく冷えやがる」

「全くね、そんな氣がするよ」

職掌柄三名は云ひ合せたやうにお互ひの顔を見合せた。そしてまた五間くらゐづつの間を置いて上流へ、下流へと、コツンコツン警戒の歩を進めた。やがて渡船場附近である。いや、これは夏の場合のこと、今は流れの表面は一帶に氷で蔽はれてゐるのだ。と、ガリガリと妙な音が氷上に聞えた。

氣をつけて闇を透してみると、三人の男が大八車を曳いて氷上を渡つて来る。車にはなにか荷

物が山と積まれてゐる様子。

「そら来た！」

隊員達は同時にさう叫びながら息を呑んだ。それにしてもなんと大膽といふか不敵なことをする奴輩であらう。こんな時刻にこんな場所を、荷物を運んで来る奴らは紛れもなく密輸入者なのだ。そらひつ捕へろ！ とばかりに三名は大八車に向つて突進した。

「待て！ どこへ行く？」

「なんだその車の荷物は？」

そしてその前に立ち塞がりながら誰何した。すると彼らはただ「へい」と答へて立ち止つた。別に警戒もしてゐない。そこで有無を云はさず、まづ逮捕して大八車の荷物を検査した。荷物は私鹽であつた。

「さあ曳くんのだ！」

「へい！」

三名の繩つきになつた密輸入者は、それでもなほ「へい」と答へるだけで、更に動する気色もなく、押収された大八車を曳つぱつて従順に歩きだした。

ところがその車が市街の入口にさしかかつたとたんである。突如、手に手に棍棒を携へた二十数名の一團が、どこにかくれてゐたものか、さつと大八車の周囲に襲ひかかつて来た。物も云はない。

「しまつた！」

と警備員は叫んだ。が既に遅かつた。最初三人の男が捕へられたときの動ぜぬ氣配も當然のこととで、これは彼らの仕組んでゐた筋書だったのである。警備員は萬策盡きて發砲したが、口惜しくも衆寡敵せず完全にノサれてしまつた。凱歌を奏して引きあげる密輸入者の一團！ その姿を重傷の身を横へながら眺める三名の警備員の眼！ 涙はいつか凍つて行くのであつた。

(3) 命とバインアツブル

そろ／＼その春も来やうといふ昭和九年四月なかばのある夜のことであつた。國税監視課巡察班長の松山春吉氏以下十四名は、取締のために江岸を巡察してゐた。すると市街の東端で、二艘の船に「バインアツブル」を積みこんで、各自棍棒を所持して警戒してゐる十数名の男の一團を發見した。

「そろ密輸だ！」

「ひつ捕へろ！」

巡察隊は一齊に逮捕に向つた。ところがこのときにもまた突然四十名の伏兵が現はれ、忽ち江岸は大亂闘の巷と化した。しかし巡察隊はわづかに十四名、密輸側は五六十名の人數である。松山氏は形勢不利とみて、亂闘を續けながら叫んだ。

「誰れか領事館警察へ走れ！ それから憲兵駐在所へ！」

するとこれを察したのか、密輸側にはかに圍みを解いて逃走してしまつた。——松山氏はか五名が、その密輸品の處置をつけて監視所へ引揚げたのはそれから一時間ほど後のことであつた。

ところがこの途中、またまた五十餘名の一團が襲撃して來たのである。松山氏はやむを得ず發砲して解散させた。全く文字通りの死闘である。しかもこの夜の衝突は更に前後六回に亘つて繰かへされたのだ。このダニのやうな密輸團の襲撃に、七名の監視員は重傷して盡の息となつたほどである。

全く一箱のバイナップルと一命とが、ここでは至極簡単に取引されてゐるのだからたまつた

ものではない。——これでは仕方がないといふわけで、専門取締のために同年六月滿洲國の設置したのが國境警察隊。それでその年の七月から十一年六月までの檢舉數は千九百五十八件に及んだのである。石川五右衛門は、云々で世に盜人の種は盡きまじ、と辭世をのこしたといふが、この密輸入者なども全く性變りのないものらしい。

で、こんな風に警備が嚴重を極めるやうになつたので、狼狽した密輸入者共は、さらにその警備を突破する手を考へた。つまり川を渡ることを止めて國際鐵橋に道を選び、隊を組むことも避けたしたわけだ。そしてそれが前述の「畢丸炎患者」といつた手となつてあらはれたのである。次の話と同じくその後のものである。

(4) 知らぬが佛の傳書鳩

國際鐵橋を通つて、日に何回となく傳書鳩が持ち運ばれる。いふまでもなく滿洲國側へである。「どうも、これはおかしい」

監視所の密偵は次の日、つひに南陽へ渡るその鳩を携へた男の後をつけて行つた。なんかあるに違ひない、と考へながら。

すると神ならぬ身のそれを知る由もない件の男は、すたすたと一軒の商家に入つて行つた。そしてまもなくそこでコカイン入の傳書筒を鳩の足にとりつけはじめた。——男はここで至極アツサリと御用になつてしまつたことは當然だが、自白したところによると、これで一日に二百くらゐせしめていたといふ。不逞の輩があらゆる手段を盡して密輸入を敢て行ふはづではある。戰場に出て健氣にも軍務に服し、あるひは戦死し負傷する傳書鳩がある今日、知らぬは佛とはいへんな悪人共の手先に使はれる傳書鳩もまた不幸憐憫の至りである。

だがこんな小細工を用ひての密輸入は外にもさらにあるといはれる。——圖門驛頭に山と積まれた奥地行貨物のうち、重油箱が約六百箱あつたので、輯和隊が不審と見て取調べた結果、表装と上部はなるほど重油であつたが、罐の下部には満洲ではサラリーに匹敵するといはれる食鹽が一杯につまつてゐた、などといふ一寸大仕かけのものさへ結構あるといふ話だ。

かつて日本の某大官が煙草を持ち過ぎてゐて罰金三百圓也を申付けられたといふ話なども一向に珍しくないはずだし、小口密輸入はとりどりの色彩を見せて橋頭を賑はすのである。いや密輸入をやる當事者から見れば賑はひだの笑話どころではない、食ふか食はれるかの境地を彷徨してゐるわけである。

次にこんな話がある。密告といふ奴だ。つまり密輸入者を密告した者にはその押収品全額の何割かを呉れるといふ規則である。ところがそれをまた悪用する狡猾な奴輩がやうとは——

(5) 國際鐵橋畔の悲劇

北海道北見の國、オホツク海に面した一漁村から、圖門景氣に魅せられて遙々南陽まで出かけて来た大工の吉村大作といふ二十六歳になる青年は、明日はいよいよ國際鐵橋を渡るのだといふ前日、その燃ゆる大志に腦を轟かせながら某旅館の一室で新聞を讀んでゐた。

するとそこへ、

「甚だ恐縮ですが、一寸新聞を見せて載けませんでせうか」

と云ひながら入つて来た善良さうな三十四五歳の男があつた。

「さあさあどうぞ遠慮なく」

「これはどうもすみません」

ペコペコ頭を下げながら押してやつた新聞に眼を落してゐた件の男は、やがて新聞を下に置くと、いやに押れくしく云つた。

「どうも有難うございました……」ときに失禮ですがどちらへ？ 私はもうこちらに来てから大分経つてゐますので、かう内地の方を見るととても懐しくつてね、實は新聞よりもなんかお話でもしてみたかったもので、へへへッ……」

嘘をつけ、この野郎！ キサマはその青年の懐にある財布が懐しいんだらう！ と、神様がもし口が利けたら、このときさう歎鳴つたであらう。だが、吉村大作はこれまた神ならぬ身の——そこでつひ旅行中の人なつこさで、團圓へ行くこと、大工であること等々すつかり彼にうち明けてしまった。

「ははあ、さうですか、ほう、大工さんですか、それはなんですか、男はすつかり感じ入つた面持ちで顔くと、ところで、と云つて急に聲を落しながらにじり寄つて来た。「ところで如何です、いい金儲けがあるんですがね。手はじめにひとつ、いやこれこそ全くの安全確實といふ仕事ですよ」

といふわけで、吉村大作が虎の子の金二百圓也をその男に渡してしまつたのはそれから一時間ほどのちであつた。

その翌日のことである。吉村大作は若干の（彼自身では、彼の二百圓と件の男の二百圓と計四

百圓分と思つてゐた）阿片を腰にまきつけて國際橋上に立つた。彼の耳には件の男の云つた「全くの安全確實といふ仕事ですよ」といふ言葉だけがあつた。で、彼は監視所の前を堂々と歩いて行つた。ところが當然のことに堂々と掴まつてしまつた。そして彼はすぐ、おやおやと思ひ、これは千里眼だ、と監視員の眼に驚ろいた。監視員は吉村大作を呼び止めると、黙つていきなり腰帯を解いたのである。

吉村大作はそこでまふまふと密輸ブローカーに引つかかつたことに氣づいたのであるが、しかし氣づいたときには既に遅かつた。どこの誰れか知らないといふ吉村大作の相手の男は、吉村が掴ると同時に別の事務所へ密告手當を買つてとつくに尻に帆をかけてゐたのである。

これはまさに國際鐵橋の生む悲劇の一幕物である。集團から個人へと移行した密輸の醜し出す種々相の一コマなのだ。だがこの密輸の全部が橋上に移つたわけではない。橋の下ではやはり三々五々と粗布の、雜貨の密輸入が行はれ、追ひつ追はれつのは活劇が早朝に、あるひは深夜に亘つて展開されるのである。そしてそこにはシェパードが何頭か訓練されて配置された。

ある夜のことである。この猛犬に噛みつかれた密輸業者の一人が、いきなり犬の頭めがけてピストルを發射した。一弾は猛犬の命を奪つた。しかしこの忠實なシェパードは、その祖先である

娘の血を決して辱しめなかつた。酷寒下にコチコチに凍つた體が発見されたのはその翌日であつた——といふエピソードもあるのである。

二、密輸入者異聞

(1) 逮捕を恐れて

昭和七年の初夏、奉天西塔大街の繁華な通りに二階建の洋館をたて住みついた金満家らしい一家族があつた。主人は張天一と稱する男。だが彼はそれからまもなく領事館警察の手で捕へられて刑務所へ居を移した。何故？ 彼の張天一といふ名は偽名で、張珍清が本名であつた。

彼の本籍地は朝鮮平北登山郡、そして彼は資産數萬圓の米穀問屋を営んでゐた。ところがこの地は滿洲國との國境接壤地で滿洲の事情は手にとるやうに分つた。朝鮮で阿片を買集めてハルビンへ持つて行けば二倍以上の儲けがあること、實際にそれをやつて、無一物だつた男が自分より多くの資産を持つやうになつたことなどを知つてゐた。そしてつひに決心して朝鮮内の阿片を露領ウラチオストツクに運び、そこから飛行機でハルビンに運び、この方法によつて二回の商取引を行つた結果、約一萬圓ほど儲けた。

第三回目もその方法で、ハルピンでうまく取引をすまし、その足で安東省の輯安縣といふところへ行つた。同地は楚山郡の對岸で、さういふ仕事をするには至極詭へ向きの隱謀策源地だつたからである。——ところがある日、同類の一人が彼を訪ねてただならぬことを告げた。——官憲の手が廻つたから、君は楚山郡に歸れば一も二もなく逮捕されてその財産は沒收されると同時に、君はすぐ刑務所行きになるだらう、と告げたのである。

勿論彼も冒險仕事であるから覺悟はしてゐたものの、かうも早くそれが官憲に知れたのかと吃驚し愕然とした。そして歸るには歸れず、悶々の幾日かを輯安縣で過した。

禁制品の密輸が發覺した以上、逮捕されれば獄役を喰ふことは必定である。それを逃れやうとすれば、少くとも十年くらゐはどこか外國で隠れて暮さなければならぬ。しかしさうなると郷里を中心にして計畫されたいろいろの事業が失敗に歸すると同時に、三萬五千五百圓の保險に加入してゐることも氣掛りになつた。そこで今後どうするべきかといふことについて種々研究した結果、自分の親友であり、楚山郡きつての資産家である金善一を呼び寄せて事情を打ち明けた。

「豫期しなかつたわけではなかつたけれどね、こんなにも早く嗅ぎつけられるとは意外だつたよ」

窓越しに空を眺めて溜息をつく張に、金一善はいふのであつた。

「かういふことになつた以上は、これからどうした方針で生きて行くかを考へることが重大問題だよ」

そこで密談が數時間に亘つて續けられ、金一善はなに食はぬ態で楚山郡へ歸つて行つた。

(2) 盛大な張の葬式

それから數日後のことである。一人の筏乗が突然張珍清の留守宅を訪れた。そしてなにか不吉な豫告でもしに來たやうな、甚だもつて不安氣な顔色で、おどおどしながら尋ねたのである。

「こちら様が張珍清といふ方のお宅でございませうか？」

「さうですが」と店員が答へた。「あなたはどちらの方ですか？ なにか？」

「私は鴨綠江の筏乗りですがね、こちらの御主人が私の筏にお乗りになつたんですよ、昨日のことですがね、ところがなんとしたことか丸太を踏み外して流れの中へ漏れてしまひまして、そのまま筏の下になつたと思つたらもう行衛が解らなくなつてしまつたんです。私共は夢我夢中で探したんですが、どうしても見つかりませんのです。お氣毒な次第ですけれども致方がありません」

なので、實はお知らせに参つたわけなんです」

云ひながら筏乗りが差し出したものを見ると、それはまがふかたなき張の所持品であつた。國境方面では交通の不便からこの筏を利用することは珍らしくないのだ。してみるとこれは疑ふ餘地がない。——そこへ出て来た張の妻はその遺品を抱いて泣き崩れてしまつたが、やがて泣きはらした眼をこすりながら、二人の番頭を伴つて、筏乗りの案内するままに溺死したといはれる現場へ馳せつけた。そして人夫を雇つて数日の間熱心に探査した。が、張の死體はつひに發見することが出来なかつた。で、萬策盡きて空しく引揚げた一行は、郷里楚山郡の自宅において盛大な葬式を執行したのであつた。

(3) 保険金をめぐる悶着

死んだ當人は氣の毒ではあるが、残された家族の今後の生活方針や現在やつてゐる事業の後始末をどうするか？

親族會議を開いて協議した結果、店の整理や遺族の世話は親族同志ですることにし、保險會社に交渉することは、信頼の出来る金善一に依頼することとなつた。——金善一は澁々これを引受

けた。そして保險會社の本社に交渉するため東京へ出發したのはそれからまもなくのことであつた。

保險會社では新義州の支店に命じて調査する一方、警察にも依頼してその真相を調査して貰つた。そこでは多くの關係人が呼び出されて取調べを受けた。けれどもやはり死んでゐることは確實であつた。しかも約二ヶ月後には張珍清とおぼしい腐爛した溺死體が現はれたのである。それが張珍清の溺死體であることは、前齒に入れてゐた金齒が唯一の證據であつた。

かうして死體まで現はれて、死んだことがいよいよ確實だとなると、二つの保險會社を合せて三萬五千圓と、簡易保險の五百圓といふ大金が一時に手に入つて來た。ここで斷つておかねばならないことは、鴨綠江では筏乗りやその他の人間が毎日三四人は溺死するのであるから、腐爛した溺死體の似たものを手に入れることはさして難事でないといふことだ。——

閑話休題——ところがその大金を手に入れた金善一は、急に金に眼がくらんでそれを横領しようと考えた。どうせ張は死んだことになつてゐるのだから、永久にこの社會から葬られてしまつた人間であり、この事實を知つてゐるのはしかも張の妻一人だけである。そして張の妻はやはりこのことを口外することは絶対に出来ない立場にあるのだ。だからこの金を着服したところで誰

一人として文句をいふ奴はない譯である。さう腹を決めた金善一は、そこで張の妻を呼んで、一金五千圓也を渡しながら云々のであつた。

「保險會社はね、全部支拂つてくれたのではなく、たった一萬圓しかくれなかつたんです。で、最初の約束通り全部の費用を差引いてしまへば、私の手元に残るのはほんの少ししかありません。しかし郷里を離れて苦しい月日を送らなければならなくなつた張君の立場に同情して、これだけそちらに差上げます」

と、いかにも恩に着せるのであつた。なにも知らない張の妻は、しかしどうにも致方がなかつた。

「さうですか、いろいろお世話様になりました。ありがたう存じました」

そしてその金を握ると夫の隠れ場所である栞安縣に向つて羽に出發したのである。

それから二日目の朝のことである。夫に會つて五千圓の金を渡し、保險會社との交渉の結果が云々であると詳細に話した。すると張は烈火の如く怒つて金善一を罵つた。

そしてその不法、否背信行爲を訴へるに由ないこの怒りを胸一ぱいにつめて、その翌日の夜密かに楚山郡の金善一の邸に、大膽にも乗込んで行つたのである。直談判以外に方法のない張は、

懐にしのばせて行つた刃物をとり出して金善一に詰め寄つた。

いかに大膽な人間でも死んだことになつてゐる張珍清だ。それが世間の眼を盗んで自分の郷里へまで乗りこんでくるとは夢にも思つてゐなかつた金は、張の大膽さに壓倒されて、しかも二三十萬の恒産のある自分として命がけでかかつて来る張とかかり合ふことが愚の骨頂であることを悟つた。そこでひたすら謝罪した。

「私が悪るかつた。實は一時の出来心でさうしたまでだから、それではこれを納めてくれ」と云つて更に四千圓を手渡した。

張はしかし暗然たる氣持ちであつた。郷里に残してある家屋と土地、事業のあとに残る財産、それらで家族の生計に心配はないのだが、なんといふか、別れの辛さともいふか、彼は涙を流して再び栞安縣へ落ちのびて行つたのである。

(4) 張天一の入籍

大金を腰に巻付けた、現實の人間でない現實の人間、といふ妙な存在となつた張珍清は、幽霊の化身となつて安住の地を求むべく日夜思案に暮れた。人の住むところ、金さへあればいたると

ところが樂園である。殊に滿洲はかういふとき、かういふ人間にとって實際感謝に堪えない天恵の地であつた。そこには無籍の人間がざらにゐる。一人自分のみが無籍者を悲しむ理由がどこにあらう！と彼は思つてもみた。だが彼はやはり文化の中に育つた人間であつた。知能的な犯罪をやるだけ文明人だつた譯である。戸籍のないことは生きてゐる人間のやうな気がしなかつた。そこで彼はなにかいい方法はないものかと思案の揚句、天上天下一つしかないまことにいい方法を考へ出した。そして早速その實行にとりかかつた。つまり速成の社會奉仕をして、人情美談をつくることに努力したのだ。かうして漸く自分の顔が賣れだした頃を見はからつて、彼は彼一流の手段によつてその村長をある料亭に招待した。そして訴へた。

「私はもとの梅安縣に生れて二十歳のときロシアに行き、十年餘り暮してきました。ところが少しばかり金を溜めて歸つてみると戸籍がない。なにをするにしてもこんな不便と不愉快なことはありません。あなたの力でなんとか入籍の出来るやうにお願いいたします」

語り終つた張は少くない金を添へて、くれぐれも懇願した。——ところで滿洲には戸籍のない人間が無数にをり、そこでは其の人間の去來跡さへ明瞭であれば、その地の村長なり區長なり

の證明によつて裁判所の手続きを経て、本籍地に入籍出来るやうになつてゐる。

さういふ譯だから、見るからに人格もあり多少財産もある張の申立を、村長は至極簡單に引受けた。その結果、張は村長の證明書をもつて京城府廳に入籍の手續きを完了したのである。かくて完全に幽霊張珍清は新しく「張天一」となつてこの世の中に生れ出たのであつた。この登記がすんだとき、張はそれこそ文字通りに甦生の喜びを感じた。そして「世の中は甘いものだ」と舌を出して笑つたかも知れない。ともかくここまで完全に化け果てた以上、もはや誰れ憚る必要もなく大道を闊歩して暮せると思つたのは當然のことであつた。——恐らく世界中に、これくらゐ完全に法網を潜つて立派な別人に仕立てあげた奴はるまい——とは、その後彼を取調べた官憲の言葉である。

(5) 幽霊現世にかへる

藏罪者張珍清の舊姿を脱ぎ捨てて無垢清廉な新人張天一になりました彼は、一通の戸籍謄本を手にすると喜び勇んで奉天市西塔大街に落つき、ここを卜して永遠の安住地たらしむべく、幸福への準備工作としてまづ二階建の洋館を新築したのであつた。

しかし彼の非眞の幸運、それがここにおいて盡きようとは神ならぬ人間の知る由もないことで

あつた。この西塔大街は、滿洲事變後急に朝鮮の人達の住宅が殖えて、今は純然たる朝鮮人街になつてしまつた。そして滿洲に来る朝鮮の人は一度は必ずこの街に足を踏み入れるのである。ここに張の安住地としての性質に大變動が起つた。その大變動に氣づかなかつたのは恐らく彼一生の不覺であつたらう。彼の郷里楚山郡の人間のみがこの街に足を踏み入れないと誰れが保證し得よう。

しかもそれが仇敵ではなくて、親しい人に偶然邂逅して、そこに悲劇の端は發したのであつた。つまり親友の口から、彼が張珍清であることが曝露したのである。

今は圍圍の身となつて鐵窓裏に呻吟してゐる張珍清、彼は四尺八九寸の小男だが、總身智慧と膽力の塊みたいな男である。智慧を惡用したばかりにこの末路とは——

三、苦闘する警官達

(1) 舉動不審な支那人

「滿洲につきもののやうにいはれてゐる馬賊——今日では匪賊といはれ、その出沒も昔に比較すると非常に減じてゐる——は、繩にかかつてしまへば觀念の眼を閉ぢて少しも惡びれた態度は示さないが、これを捕へ損じたら大變である」

嘗て新聞記者として滿洲に活躍してゐたことのあるT氏はかう前置きして當時のことを語るのであつた。以下は實際に見聞して來た同氏の話である。

——何しろ大概な奴は精巧なモーゼル拳銃を所持してゐるのだから、ウツカリ近くへは寄りつけない。こんなときは官憲も仕方がないから捕縛する念を捨てて、相手を斃すか自分が斃されるかの最後的手段で立ち向ふ。そこで市街の真中などでも危険極まる射撃戦が開始されるのであつた。

大正十一年の初夏のことだ。長春で刑事一名が即死し、警部一名が負傷したことがある。この事件は舉動不審な二人の支那人が滿鐵附屬地の支那遊廓寶順堂といふ妓樓に遊興してゐるとの密偵の報告を受けた長春警務署の活動に端を發した。まづ警部補以下數名の警官が逮捕に向つた。ところがこれを感じた二人の男——それは正しく附屬地を荒し廻る馬賊であつた——は、手が廻つたと感づくや矢庭に懐中からモーゼル拳銃をとり出して前に進んだ刑事に一發喰はした。そして刑事が「アツ！」と叫びながら打ち倒れると、兇賊二人はそのまま表へ飛び出し、右と左に別れて遁走した。かうして一人は完全に逃走、そこで警官は他の一人を目標に追つて追つて追ひ廻はした。

恰度眞晝時であつたし、逃げながら時々發射する賊の銃聲が附近の家並に卻るので、町の人々は何事だらうと次々戶外へ飛び出した。それを見た賊は一直線に走つて逃げる事が出来ず、つひに民家の袋小路の奥へ逃げこんでしまつた。後には群衆と警官だ。煉瓦と煉瓦の壁に圍まれた小路ではあるし、賊はもうこれまでと思つたか、血走る眼を睜いて寄らば射たうとばかり身構へた。

警官の方ではそこが袋小路であるといふことは知つてゐたが、しかし野暮にこの中へ突進する

ことは出来ない。そこで屋根の上へのぼつて上から彈丸を浴びせかけた。かうして頭上と小路の出口から挾撃された賊は、たちまち一二彈を受けさすがに怯んで來た。そしてつひにこの小路の奥で參つてしまつたが、このとき警官の方でも警部補が肩に拳銃彈を受けて傷ついた。——全くこんな場合馬賊といふ奴は手負ひの猛虎みたいになつて荒れ狂ふのである。

(2) 共同便所の活劇

大正八年頃のことであつた。「馬賊だ馬賊だ！」といふ叫び聲に、長春市民中の彌次の氣のある若い連中は、それぞれ拳銃を執つて表へ飛び出した。その中を一人の骨格逞しい男が藪地に逃げて行く。それが馬賊なのだ。が、賊はつひに逃げ場を失つて行く先の共同便所の中へ飛びこんでしまつた。

さてかうなると警官達は困つてしまつた。共同便所の周圍は煉瓦だし、正面には煉瓦壁がある。たつた一個所ある窓は却つて賊の方に都合に出來てゐて、攻撃には全く不利なことになつてしまつたのだ。そこで種々協議した末、糞尿汲取口を外してそこから彈丸を射ちこむことになり、一人の刑事が六尺ほどある棒をもつて煉瓦塀に體を寄せかけ、横の方から汲取口の扉を叩き破つ

た。それから刑事や巡査が交代でドンドン弾丸を射ちこんだ。が依然として物音一つしない。するとそのとき一人の巡査が次のやうに提案した。

「どうでせう、麻袋か何かに石油をぶつけて汲取口で燃してみたら、さうすれば、若し自殺でもしたのでないとすれば、まさか平氣ではゐられませんまい」

警部補は少し考へてゐたが、結局この巡査の提案を採用した。

「ぢやあ、奴が苦しくなつて飛び出したら一斉射撃だ」

用意が整つた。麻袋に石油を注ぎかけるとそれに火を点けた。パツと燃え上る炎、黒煙が濛々と物凄く渦を巻いで揚る。彌次馬連中もそれを見るから、興味と不安とを同時に感じながら息を呑んだ。中には巡査の中へまじつて拳銃を便所に向けてゐる男もある。

「さあそいつを棒で汲取口へ押しこんで見たまへ」

警部補が命令を下すと、巡査は松丸太の先に燃えてゐる麻袋をひつけてグイツと押しこんだ。少々氣の毒みたいではあるが、しかしこれも治安維持のためには已むを得ないことなのだ。煤煙と煙とが便所の踏み板に堰かれて、ぐるぐる輪を描きながら汲取口から外へ向けて出て来る。が、次の刹那それはスーッと内部へ吸ひこまれ、同時に便所の窓の隙間から黒煙が吹き出した。三秒、

五秒、だが依然として物音はしない。

と、ガチャガチャ、ガチャン——突然けたたましい音が起つて便所の窓硝子が破壊された。

「あつ！」窓の下に立つてゐた、例の麻袋を汲取口に押しこんだ巡査は、このとき叫びながら颯つと身を翻へした。その時遅し、窓からモーゼルの銃光が覗いて、

「ターン、ターン！」

二發まで続け射らだ。以前の場所にゐたならば、さきの巡査はまともに弾丸を浴びてゐたに違ひなかつた。

馬賊は苦しまぎれに火を踏み消さうと思つたのであらうが、夫れをやるにしても足を出したら射たれることは判つてゐるから、先づ外に自分を狙つてゐる警官を退かせようと、窓を破つて弾を射ち、それから火を踏み消しはじめたものらしい。だが窓からは黒煙が相かはらず吹きだし、異臭は更にひどくなつて來た。糞尿が焼けるといふのか煮えるといふのか——

するとこのとき、長春守備隊長が、あまり町の騒ぎが激しいので來て見たと云つて、兵を十名ほど引率して現はれた。

「ええ、この便所に入つとる？ 汚ない奴だね、だがなるほどあすこならまさに金城鐵壁だね、

ハッハッハ

仔細を聞くと隊長はさう云つて笑つた。それから應援しようといふことになり、附近の家から梯子を借りてこさせて便所の屋根へかけた。屋根を壊してそこから射ち込もうといふのである。ゴツンゴツン、バラバラ、ゴツンバラバラ——屋根に登つた兵が、屋根を丸太の尻で突くと、そんな音がした。突く度に崩れた土が便所の中へ落ちこむのだ。そして土煙が麻袋の煤煙と混つて汲口から窓から、外へ流れ出る。やがて屋根には穴が空けられた。

「さあもういい、覗いてみるかな？」

「危ないぞ、油断せずにやれ、そんな奴の弾なんか喰つたんぢやまじやくに合はんからなあ」
「よしきた」一人の兵が屋根に這つて密つと覗いた。「ゐるゐる、真黒な面をして上を覗んでけつかるわい」

「さうか拳銃はどうしとる？」

「暗いからよく見えないが、胸のところに持つとるやうだ」

「さうかよし、やらう！」

タタタタタ……と一斉射撃の音がした。同時に相手の方でもぶつばなした。が、今度はその響

きの中にバタンといふ大きな音がした。やつ奴参つたのである。

「参つたな野郎！ しかしこの中へ立てこもつて抵抗しやうとは呆れた奴だ！」

「敵ながら天晴れか、ハッハッハ」

かうしてつひに兇賊は斃れたが、こやつは市街地荒しの馬賊中でも有名な奴であつて、かつて長春城内で支那巡警に追はれたことがあつたが、そのときは巧みに逃れてゐたのがいよいよ悪運盡きたわけであつた。それにしても汚ない最期ではある。

(3) 尊 ぎ 殉 職

大正九年十二月なかばの夜であつた。長春は南問屋敷派出所に勤務してゐた浦上巡査は、古参の小林巡査と二人でストーブを焚きながら、物騒な馬賊の話などをしてゐた。すると電話のベルがけたたましく鳴り響いた。

「今時分何事だらう？ 若しかしたらまた馬賊でも出たのぢやないかな？」

決して珍らしいことでもなかつたが、直覺的にさう思ひながら急いで受話器を耳にあてると、それは本署からで、祝町の支那雜貨商に三人の馬賊が闖入したとの通達であつた。

「賊の服装は三人共淺黄木綿の支那服で、各自拳銃を所有してゐる。二人の男は中肉中背だが、一人は骨格逞ましい巨漢である。本署からも刑事と巡査を急派して非常線は擴大したが、君の方でも充分に警戒してくれ」

とのことである。で小林巡査が云つた。

「では浦上君、君は氣の毒だがこの前の道を警戒してくれ給へ、僕はあの十字路を警戒するにとにするから」

「承知しました、それでは早速」

さういつて二人は一緒に派出所を出て、小林巡査は南へ三丁ばかりの十字路上へ、浦上巡査は派出所の前方に真すぐに伸びてゐる一本道を西へ進んで行つた。

雪を孕んだ灰色の雲が空一面に垂れ下つて、地上一面の雪と睨み合つてゐる。風はなかつたが零下三十何度といふ寒氣だ。今までストーブに暖つてゐた浦上巡査の體も、かうして頭上は雪雲に蔽はれ、地面の雪の上に立つと、忽ち凍えるやうに冷へて行つた。

「うう寒つ！」なんか縮木で締めつりられでもするやうに、周圍から蔭々と襲つて来る寒氣を骨身に感ずると、浦上巡査は身顫ひしながら立ち止つた。「恐ろしく冷へやがる」

そして外套の下で拳銃の床尾を堅く握り、要心深く雪の路上に眼を走らせた。闇ではあるが雪明りだ。しかしそれとて極めてかすかな明るさで、音さへ立てなければ五六間先きに人がゐてもそれを見ることは一寸出来ないほどであつた。

人の来る氣配もなかつたので、浦上巡査はまた靜かに歩きはじめた。支那巨商の土塀に添つて一直線に西へ——するとまもなくである。前方に二つの人影が忽然と現はれた。しかも人影はどうやら浦上巡査の方へ向つて歩いて来るらしい。と、早くも緊張した浦上巡査は、ハツとして歩みを止めた。賊か？ 否か？

二つの影は黙々として進み近づいて来る。七間、八間——浦上巡査は土塀に身を寄せてジーツと前方を凝視した。先頭が中肉の男、後に續くのが雲つくばかりの巨大漢、共に支那服を纏つてゐる。浦上巡査はそれを確かめると思はずギクリとした。確に例の馬賊だ！そして手早く拳銃をとり出すと、巨漢に銃口を向けながら、タツタツタツと三四歩近寄つて行つた。

「誰れか！」

浦上巡査は大聲をあけて誰何し、二人の舉動に注意した。まぎれもなく先刻通達を受けた雜貨屋へ押入つた馬賊である。彼らは襲つたときには三人であつたが、一人は途中からはぐれ、二人

連れたつて逃路を求めながらかなり長い間非常線内を彷徨ひ、揚句のはてに南間屋敷に足を向け
て来たものとみえた。そして一刻も早く附屬地外へ逃げ出さうとしてやつて来たところを突然誰
何されたのである。

だが二人は不意に呼び止められてもそれほど驚ろいた風は見えなかつた。ただ云ひ合はしたや
うに懐中へ手を差し入れる氣配がした。

「拳銃だな！」

と、浦上巡査は直感し、そしてもう猶餘はしなかつた。

「ターン」

「ターン」

「ターン」

三銃の銃聲がほとんど同時に夜空へ反響した。浦上巡査の發射したのが先であつたか、馬賊ら
の發射したのが速かつたのか、そして巨漢と浦上巡査が同時にバツタリと倒れ、一人の賊だけが
踵をかへして疾風の如く闇の中へ姿を消した。

「うむ……」

と呻きながら浦上巡査は胸を押さへて起き上つた。彼は強力なモーゼル拳銃で胸部を貫かれて
轉倒したのであつたが、この重傷にも絶命せず、勇敢にも利かぬ體を氣力だけで起してなほも賊
を追跡しようとしたのである。

だが――

「かあーッ」

浦上巡査は起ち上つた拍子に多量の鮮血を吐くと、よろよろと足をもつらせながら再び暈と倒
れた。「うむ……」そして苦悶と無念の呻きを一つのこしたきりこと切れてしまつたのである。

このとき銃聲を聞きつけて駆けつけたのは小林巡査であつた。凍つた雪を鮮血に染め、右手に
堅く拳銃を握り、左手を伸して指を額はせながら、今がつくりと落ちて行かうとする斷末魔の浦
上巡査を見て、小林巡査は顛倒せんとばかりに愕然とした。

「浦上君！ 浦上巡査！」

抱き起し、耳に口を當てて呼んだが、浦上巡査は口惜しくもつひに答へなかつた。ところがこ
のとき、傍らに横つてゐた、浦上巡査に射撃されて斃れたと思つた兇賊が、ムクムクと起き上る
や一目散に西へ向つて走り出した。

「おのれ、待て！」

小林巡査は續いて後を追ひながら、拳銃弾をこめてある限り浴せかけた。しかし賊は途中で一度轉んだが、またもやムツクリと起き上つて遂ひに闇の中へ消え去つてしまつた。

浦上巡査の遺骸は直ちに満鐵醫院へ擔ぎこまれ、署員の懇ろな通夜を受けて厚く葬られたが、心にかかるのは確に傷ついた筈の兇賊の行衛であつた。現場から西へ一二丁、賊のそれらしい血痕が點々と滴り落ちてゐるのをその翌朝發見して、警務署では八方に嚴重な捜査の手を擴げた。

するとやがて附屬地を距ること東北へ十餘丁、長春から石碑嶺炭坑に通する手押軌道と、吉長川交叉點附近の、原つばの中の川べりにこの兇賊の斃れてゐるのを石炭運搬夫が發見して届出たので、檢視すると驚いたことには、此奴も浦上巡査同様胸部から斜めに肺を、見事に射ち貫かれてゐたのであつた。

だが、野獸の如きこの賊は、それにも怯けず雪の原野をひた走りにここまで遁れて來たのであるが、しかも奴はその負傷のために絶命したのではなく、直接の死因はあの刺すやうな寒氣に凍えたためであつたといはれる。

四、支那事變と天津領事館警察

わが支那駐屯軍警備隊から、天津總領事館警察部に、租界境界線と工場地帯警備の協力を求めて來たのは、事變勃發後六日目の七月十二日であつた。

かくて七月二十九日午前二時、本署では、第一分署の佐藤第一小隊から「華街第五區北寧公園附近に當り小銃、機關銃の音が頻りにして交戦状態に入りたるもの如し」との報告を受けたのであつたが、その直後、支那側保安隊は大舉して租界を襲撃し、迫撃砲、機關銃の音が突如として靜寂を破つた。

警察部では直ちに本署内にあつた第二小隊員の一部と豫備員を藤井、山崎の二隊に分け、藤井部隊を救援部隊とし山崎部隊を領事館を中心とする附近の警備に當らせた。このとき領事館では堀内總領事以下が階上の廣間で對策を協議中であつたが、北側の各室は敵の銃弾が絶えず飛來して危険なので、消燈の上南側の室に移轉しなければならなかつた。しかも敵の全面的攻撃はいよいよ猛烈となり、迫撃砲は租界内の諸所に落下炸烈し、敵は次第に租界へ近づいて來る。

午前三時三十分頃、羽吉部長は部下八名と共にわが發電所を警備してゐると、八里臺方面から来た數十名の支那保安隊に襲撃されたが、敢然これと應戦、戦闘二十分の後徹底的な打撃を與へてこれを撃退した。

すると間なく、また第二分署から「優勢な敵部隊は八里臺方面から租界侵入を敢行すべく猛烈な射撃を開始し來りたるをもつて、滿洲國よりの派遣警備隊と協力、住吉街の線に依り之に應射激戦の後撃退せり。敵は我反撃により八里臺方面に後退、射撃緩慢となれり。持久體勢を整へ我が警備力の集中を計らんとする牽制策にあらすやと思料さる」との報告があつた。

この間第一分署佐藤第一小隊警備地域である朝日街、山口街一帯の線には華街からの敵銃砲彈の炸裂が物凄く、わが警察官がモーゼル拳銃で反撃を加へたが、敵は煉瓦家屋に據つてゐるため反撃の効果は極めて薄く、止むなくわが方は敵を誘ひ出して射撃する方法をとり、敵の十字火を浴びながら悲壯な決意で對峙した。すると敵は一舉にわが警察分署を衝かうとして前方約二百二十米の地點に土嚢をもつて障地を構築し、たくみに民家を利用して次第に分署へ向つて進出して來た。

佐藤第一小隊はそこで直ちに一斉攻撃を開始し、本隊から救援のためトラックで急行した藤井

部隊と共に猛烈な市街戦を展開した。すると第一分署における戦闘開始と共に、午前五時、軍司令部から、わが租界に通ずる佛華兩界の電車通行遮断の命令があつた。しかも午前五時半には、支那保安隊が、境界線突破を目ざして、迫撃砲、機關銃の掩護射撃のうらに一舉に肉迫して來たのである。

わが警察部隊は必死になつて反撃した。が、悲しや裝備が貧弱なため惡戦苦闘、つひに同地派遣警察隊長河野警部以下三十二名は討死を覚悟しなければならぬやうな状態になつた。

この時、租界攻撃中の敵偵察と連絡に當つてゐた山崎第二豫備隊は、第一分署の危機と見てとると、同隊を率ゐて第一分署に急援する一方、枝巡査に命じて兵器の輸送を強行させた。續いて本署では第二小隊長福島警部補以下七名に、第一分署派遣隊救援を兼ねて兵器彈藥の強行輸送を命じ、トラックで出動せしめたところが、敵はこれを感じて救援隊の進路である旭街に向つて迫撃砲や小銃の猛射を浴びせ、わが急援隊との間に猛烈な市街戦が展開された。かくて福島部隊と第一分署派遣隊との間に未だ連絡の出來ないうちに第一分署の交戦隊の彈藥はほとんど撃ち盡されてしまつた。

これを知つた敵が得たりとばかり撃ち出す迫撃砲の破片で、第一分署の屋上で奮戦中の柴巡査

389
452

部長が重傷を負ふなど、分署の陥落は今や目睫に迫つて来た。

そこで河野巡查部長は、敵弾の飛來する中でやつと「我第一分署は極力奮戦中なるも優勢なる敵の重圍に陥りたり」との悲壯な電話を本署に送つた。

川島署長代理は電話を受けると直ちに豫備隊全員二十三名の出動準備を命じ、第一分署には、只今豫備隊全員を指揮、第一分署應援のため出動すべきにつき、本隊到着まで分署を死守すべしと命令し、山崎警部以下豫備隊員二十三名を指揮出動した。そして途中旭街で敵の大部隊と對峙交戦中の福島部隊を指揮下に入れて強行突破を敢行、第一分署にかけつけて、午前七時三十分には早くも敵の大部隊を撃滅したのであつた。

このやうに天津警察官は軍と同様の動きをして租界に一步も敵を入れず、天晴れ重任を全うしたばかりか、その後も引續いて軍と協力して戦闘あるひは戦後の建設工作に従事してゐるのである。

昭和十四年五月廿五日 印刷
昭和十四年六月五日 發行

「國境警察物語」 定價拾錢（送料三錢）
著者 中野 境 夫

發行人 清水 次 信
東京市澁谷區代々木山谷町九三

印刷所 照井印刷所
東京市赤坂區丹後町九七

發行所 代々木出版社
東京市澁谷區代々木山谷町九三
電話四谷五〇五七番

一 販賣所
二 配給所
三 電話
東京市麹町區飯田町一ノ三四
電話九段二七六五番
板橋東京一〇六五七二番

鐵道厚生會



9
2

出亦々代